

芋喰僧都旧跡〔妙心寺北門内封境壺町許に、むかし真乗院といふ仁和寺の末院あり、此院主盛親僧都とて、常に

芋を多く食して仏道修行あるよし、つれぐ草に書たり。いにしへは妙心寺の境内狭少なり、花園法皇仙洞を建させ給はん已前は、関山国師僅なる草庵をいとなみ閑居し給ふに、庵の屋根破れて雨もりければ、市目笠を被き坐禅し給ひけり。此時国師の故郷信州の人訪ひ来り、此体を見て笑止に思ひ、金を指出しこれにて草菴を修補し給へといふ。国師これを見て大に怒り、汝はわれを訪ふにあらず、庵室の弊を訪ふなり、早く立去るべしと、金と共に外面へ投出されける。此人投られながら言下に悟道して、国師の清浄無染を賞して慇懃に礼拝し帰られけるとぞ〕

つれぐ草云 真乗院に盛親僧都とて、やんごとなき智者有けり。いもがしらといふものをこのみておほくくひけり。

談義の座にてもおほきなる鉢にうづたかくもりて、ひざもとにをきつゝくひながら、文をもよみけり。わづらふ事あるには七日二七日など療治とてこもりゐて、思ふやうによき芋がしらをえらびて、おほく食てよろづの病をいやしけり。人にくはする事なし、たゞひとりのみぞくひける。きはめてまづしかりけるに、師匠しにざまに錢二百貫と坊ひとつをゆづりたりけるを、坊を百貫に売て、かれこれ三万疋をいもがしらのあしとさだめて京なる人にあづけをきて、十貫づゝとりよせて芋がしらをともしからずめしけるほどに、又こと用にもちゆる事なくて其あしみな成にけり。三百貫の物をまづしき身にまふけてかくはからひける、まことに有がたき道心者なりとぞ人申ける。此僧都或法師を見て、しろうるりといふ名を付たりけりとは何物ぞと人のとひければ、さる物をわれもしらず、も

しあらましかば此僧のかほに似てんとぞいひける。此僧都みめよくちからつよく、大食にて能書学生弁説人にすぐれて、宗の法燈なれば寺中にもおもく思はれたりけれども、世をかく思ひたるくせものにて、万自由よろづにして大かた人にしたがふといふ事なし。出仕して饗膳などにつく時も、みな人の前すへわたすをまたず、わが前にすへぬれば、やがてひとりうちくひて帰りたければ、ひとりついたりてゆきけり。とき非時も人にひとしく定てくはず、わがくひたき時、夜なかにも暁にもくひて、ねふたければ昼もかけこもりて、いかなる大事あれども人のいふ事き、いれず、目覚ぬればいく夜もいねず、心をすましてうそぶきありきなど、よのつねならぬさまなれど、人にいとはれず、よろづゆるされけり。徳のいたれりけるにや。